

実生のヒヨドリジョウゴ

先日、友人から素敵なメールが来ました。

「去年の秋、近くの緑地で、散歩の途中に赤い、可愛い実を拾いまして、ベランダの植木鉢に埋めておきましたら、何と、芽が出て、50センチほどに育ちました。そして、白い、可愛い花を咲かせました。

調べましたら、ヒヨドリジョウゴというのらしく、秋に、赤い実を付けるのではないかしら、ひょっとして、ヒヨドリが、それを食べに来るのではないかしら、と楽しみにしております。主人が、お花の写真を撮りましたので、お送りしてみます。」

下の写真が添付されていました。



「実生で、花を咲かせるまでに至る」ということは、本当にワクワクと期待を持たせる出来事で、私のような草花について何も知らない者にとっては、生命の神秘を味あわせていただく幸いな事件です。私はすぐに聖書の言葉が思い浮かびました。

はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。(ヨハネ12:24)

麦の実、種が、自らを地に落とし、地に隠れて、自らの姿を変容させてこそ、次の実を生むということは、農業的には、取り立てて大仰なことではなく、当たり前のことなのでしょう。けれども、これは「たとえ」ですから、その背後の意味をもう一度かみしめてみなくてはなりません。自分自身を種と考えれば、自らを地に落とし、地に隠れ、自らの姿を変容させる、つまり「死ぬ」ということを受容することは、なかなか出来ないことです。いつまでも、いつまでも自分自身の「元気」な姿に固執するのが常です。けれども、元気だと思っている種も老化し、賞味期限を過ぎて、死んでも役立たずという事態もあるやもしれません。ですから、幸せに歳を重ねてきた今、自らを種として、次の実のなることを祈って、自分を捧げることが学びたいと思いました。

最近、友人たちが集まって、話題にすることが、すっかり変わりました。昔は夢、恋愛、仕事などでしたが、現役を退いたころから、趣味、お稽古事、ボランティア活動に関する話題になり、いつの間にか、健康、病気の話になり、とうとうお墓の話で盛り上がったのです。もちろん、現代社会の問題、政治についての危惧などを様々な立場から自由に話します。けれども、みんな、歳を重ねて、死についての思いが現実的になってきました。友人が種を蒔いて、それが育つ様子に、喜び、感動しておられる日々を教えていただいて、私も嬉しくなりました。赤い実をつけたヒヨドリジョウゴの写真を送っていただくのを楽しみにしているところです。小さな生き物でもほんとうにすごい！